

難波西鶴と海ノ道

【76】

森田 雅也

「これまで西鶴と海ノ道について話を展開してきましたが、今まで断片的には述べながら、ちゃんと説明していない西鶴作品があります。それは西鶴が唯一地誌として残している『一目玉鉾』です。

『江戸前期の地誌』4巻4冊。井原西鶴著。絵師未詳。元禄2(1689)年刊。蝦夷千島から五島・壱岐・対馬に至る間の城下町・宿駅・物産・社寺・名所・古跡・故事・古歌などを記述した絵入り旅行案内。「東海道名跡図会」(寛政

7年刊)は、この東海道の部分を求版再刷したもの(『日本国語大辞典』)。

仮に、この書のすべてが西鶴の実際の見聞によるとすれば、同時代の芭蕉などとは比較にならないほどの旅人ということになります

元禄15(1702)年刊の紀行文です。刊行された年には、すでに芭蕉(1644~94年)は亡くなってい

ますが、その旅は元禄2(1689)年3月27日、門弟曾良を伴って江戸深川を出発して、奥州、北陸の名所旧跡を巡り、同年9月6日伊勢に向かうため大垣に着するとこの行路です。

『奥の細道』では、現在の宮城県白石市斎川村「甲冑堂」を訪れたときの場面を以下のように記述しています。「中にも二人の嫁がしるし先哀也。女なれどもかひがひしき名の世に聞えつる物かなと袂をぬらしぬ」。

「二人の嫁」とは、源義経の忠臣として、浄瑠璃や歌舞伎などでなじみ深い「継信・忠信」兄弟の妻を指します。芭蕉は「夏草や兵どもが夢のあと」の句でも有名なように、『奥の細道』では、源平の盛衰にかかわる古戦場を意識して巡っています。

佐藤継信は、屋島の戦いで、平家方が義経を狙った

「奥の細道」と「一目玉鉾」

矢を我が身で防いで戦死し、忠信は鎌倉勢に追われる身となった義経一行にあって、吉野で義経の身代わりとなった忠臣です。その妻たちとなれば、芭蕉は是非でも立ち寄りたければなりません。佐藤庄司は兄弟の親。その地に祀られている甲冑堂が、兄弟の留守を守る嫁たちの勇姿とすれば感動ですね。

ところが、意外にも、この甲冑堂が2人の嫁だと伝えている『奥の細道』以前の地誌は、西鶴の『一目玉鉾』だけなのです。西鶴の九州の情報が正確なものだったという例として、『一目玉鉾』をあげたのですが、もうしばらく、本論を離れてこの芭蕉と西鶴の旅について述べてみます。夏休み特集としてお許しください。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

芭蕉と西鶴の旅